同志社大学同志社社史資料センター所蔵「創立六十周年記念募金計画」解題

松居宏枝
八木智生
星山真慶

はじめに

本稿は、「創立六十周年記念募金計画」[1]所収、ヴォーリズ建築事務所設計の五枚の青焼き図面に着目し、一九三五（昭和一〇）年の同志社創立六〇周年を記念したキャンパス整備計画について明らかにするものである。なお、この計画は体育館や校舎の建設までには至らず、同志社のキャンパスには一切反映されていない。こうした幻の計画であるとはいえ、ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（William Merrell Vories, 一八八〇－一九六四年）

が率いるヴォーリズ建築事務所による壮大なキャンパス整備計画は特筆に値するものであり、建築設計を依頼した同志社内部の意向を含め、明らかにしておく必要があると考える。

同資料に関してはすでに、二〇二一（令和三）年一〇月発行『同志社時報』第一五二号所収の「同志社の逸品 Collection 14 幻のヴォーリズ建築―一九三五年同志社創立六〇周年記念計画―」でも紹介したが、そこで挙げたものは図面の一部であること、そして紙幅の都合により言及できなかった書簡史料があるため、あらためて全体を紹介し分析を試みることとした。[2]

さらに今回、ヴォーリズ建築事務所所蔵の関連図面も併せて紹介する。これによって、創立六〇周年に際して計画されたキャンパス整備計画を詳細に明らかにすることが可能となった。ヴォーリズ建築事務所および同志社社史資料センター所蔵の図面の内容については、一九一、一九二頁の表1にまとめ、図面を口絵ⅳ～ⅷ頁に掲載している。適宜併せて参照されたい。

なお、史料はできるだけ旧字体を新字体に改めた。初出以降の年代は、西暦のみ記載する。資料名や引用では「六十周年」等とし、本文中では「六〇周年」等を用いる。

一、「創立六十周年記念募金計画」図面について

本稿で紹介する同志社社史資料センター所蔵の青焼き図面は、作製年月日順に一九三五年六月二〇日「大体育館」[3]、同年六月二一日「学園平面図」[4]、同年七月一八日「中学校舎其一」[5]、同年七月一九日「中学校舎其二」[6]、同年八月一日「学園鳥瞰図」[7]の五枚からなる青焼きの図面である。設計は、前述の通りヴォーリズ建築事務所

表1

作製年月日	図面タイトル（付け題は［　］使用）	備考	口絵掲載の頁
1935年3月8日	Lay Out for Doshisha Univ. Kyoto	Revised May 22nd '35	
1935年3月25日	Sketch of Proposed Building for Theological Seminary Doshisha Kyoto	Third Floor Plan, Second Floor Plan, First Floor Plan, Semibasement Plan	
1935年3月28日	Sketch of Proposed Semmon Bldg for Doshisha Kyoto	Third Floor Plan, Second Floor Plan, First Floor Plan	vii頁
1935年4月10日	Sketch of Proposed Main Building for Doshisha Kyoto	Third Floor Plan	
1935年4月10日	Sketch of Proposed Main Building for Doshisha Kyoto	Second Floor Plan	
1935年4月10日	Sketch of Proposed Main Building for Doshisha Kyoto	First Floor Plan	vii頁
1935年4月11日	Sketch of Proposed Middle School Bldg for Doshisha Kyoto	Third Floor Plan, Second Floor Plan	
1935年4月11日	Sketch of Proposed Middle School Bldg for Doshisha Kyoto	First Floor Plan	
1935年5月22日	Sketch of Proposed Middle School Bldg for Doshisha Kyoto	Fourth Floor Plan, Third Floor Plan	
1935年5月22日	Sketch of Proposed Middle School Bldg for Doshisha Kyoto	Second Floor Plan, First Floor Plan	
1935年5月25日	Sketch of Proposed Gymnasium Bldg for Doshisha Kyoto	First Floor Plan, Basement Plan	
[1935]年5月27日	Sketch of Proposed Gymnasium Bldg for Doshisha Kyoto	Second Floor Plan, First Floor Plan	
1935年6月20日	Sketch of Proposed Gymnasium Bldg for Doshisha Kyoto	Third Floor Plan, Second Floor Plan, First Floor Plan	
1935年6月20日	Sketch of Proposed Gymnasium Bldg for Doshisha Kyoto	青焼き、「大体育館」、Third Floor Plan, Second Floor Plan, First Floor Plan	v頁
1935年6月21日	Lay Out for Doshisha Univ. Kyoto		
1935年6月21日	Lay Out for Doshisha Univ. Kyoto	青焼き、「学園平面図」	v頁
1935年7月18日	Sketch of Proposed Middle School Bldg for Doshisha Kyoto	First Floor Plan, Basement Plan, Middle-School Dormitory (Second & Third Floor Plan, First Floor Plan Basement)	
1935年7月18日	Sketch of Proposed Middle School Bldgs for Doshisha Kyoto	青焼き、「中学校舎 其一」、First Floor Plan, Basement Plan, Middle-School Dormitory (Second & Third Floor Plan, First Floor Plan Basement)	vi頁

作製年月日	図面タイトル（付け題は［　］使用）	備考	口絵掲載の頁
1935年7月19日	Sketch of Proposed Middle School Bldg for Doshisha Kyoto	Third Floor Plan, Second Floor Plan	
1935年7月19日	Sketch of Proposed Middle School Bldgs for Doshisha Kyoto	青焼き、「中学校舎 其二」、Third Floor Plan, Second Floor Plan	vi頁
1935年8月1日	Birdseye View of Doshisha Kyoto	青焼き、「学園鳥瞰図」	iv頁
1935年8月8日	Sketch of Proposed Gymnasium Bldg for Doshisha Kyoto	Third Floor Plan, Second Floor Plan	
1935年8月8日	Sketch of Proposed Gymnasium Bldg for Doshisha Kyoto	First Floor Plan, Basement Plan	
1936年6月5日	Mailn Building for Doshisha	本館正面の彩色スケッチ	
日付なし	［本館正面スケッチ］		viii頁
日付なし	［本館側面スケッチ］		viii頁
日付なし	［ロの字形校舎の下書きヵ］	彩色あり	
日付なし	［ロの字形校舎の下書きヵ］	彩色あり	
日付なし	［ロの字形校舎の下書きヵ］	彩色あり	
日付なし	［本館正面スケッチ］		
日付なし	［本館正面スケッチ］		
日付なし	［本館正面スケッチ］		
日付なし	［本館正面スケッチ］		
日付なし	［本館正面スケッチ］		
日付なし	［本館正面スケッチ］		
日付なし	［本館正面スケッチ］		
日付なし	［本館正面コンテ画］		

＊1　グレーの網掛けの図面は、同志社社史資料センター所蔵「創立六十周年記念募金計画」所収の青焼き図面。それ以外は、㈱一粒社ヴォーリズの建築事務所所蔵の図面。

＊2　本誌口絵に掲載した図面については、頁を記載した。

が行った。なお、ヴォーリズ建築事務所による同志社の建物には、啓明館書庫（一九一五（大正四）年九月二〇日竣工）、致遠館（一世、一九一六（大正五）年三月末竣工）、啓明館本館（一九二〇（大正九）年三月三一日竣工）、アーモスト館（一九三一（昭和七）年三月二〇日竣工）、同付属屋、新島遺品庫（一九四二（昭和一七）年一月竣工）があり、致遠館以外の建物が現存している。

本稿で紹介する図面には興味深い点が多々みられる。まず、「大体育館」は三階建てで、一階には温水プール、ロッカー、医務室が計画された。二階には運動場兼大講堂、特別体育室、小体操室、三階には剣道場、柔道場がそれぞれ設計されている。

日本初の常設の温水プールは、一九一七（大正六）年に建てられた東京ＹＭＣＡの室内温水プール付き総合体育館である。[8] この東京ＹＭＣＡの総合体育館を設計したのもヴォーリズであった。[9] 上和田茂によれば、ヴォーリズは一九一一（明治四四）～一九二五（大正一四）年の間、京都、神戸、横浜、東京、名古屋、大阪のＹＭＣＡの屋内体育施設の設計に関わっていた。[10] 同志社の図面にみられる温水プール付きの屋内体育施設は、設備や規模といった点をみても、それまでヴォーリズが手掛けてきた各地のＹＭＣＡの体育施設との共通点を数多く持ちあわせている。

次に紹介するのは、「学園平面図」である。これは、先に紹介した「大体育館」と一日後に作製された。この図面によれば、大体育館が彰栄館の位置にあり、運動場が隣接している。礼拝堂、有終館の位置は変わらないが、新たに学生会館と中庭付きのロの字形の本館が設けられている。本館には、「大学、予科、専門学校教室」とあり、大学と大学予科、専門学校の各教室に使用する目的であることがわかる。

同時に、一九三五年当時は存在していたにもかかわらず、この図面には見られない建物が多々ある。それは、

現在のハリス理化学館、現在のクラーク記念館、同志社事務所、弘風館（一世）、徳照館（一世）、そして一九一六年に竣工した致遠館（一世）などがそれである。特に興味深いのはヴォーリズ建築事務所によって設計された致遠館（一世）で、一九三五年当時、竣工から一九年しか経っていない建物である。本館は、これらの建物に取って代わる位置に計画され、機能も統合するように計画されたと考えられる。

続いて、「中学校舎其一」、「中学校舎其二」を紹介する。中学校舎も本館同様に中庭をもつロの字形の校舎である。地上三階・地下一階建てで、一階から渡り廊下で結ばれた三階建ての寄宿舎を併設している。各教室とロッカールームに加え、工業作業室や実験室、さらには地下に食堂と銃器室（Gun Room）を備えていた。寄宿舎は二人用の個室と、共用のトイレ、シャワー、食堂、読書室、社交場が設けられた。

最後に、「学園鳥瞰図」である。この構想全体を俯瞰する図面は、これまで紹介した各所の図面のもっとも後に作製されている。さて、まず目を引くのが、「Ⓐ本館」と書かれた、中央にあるロの字形の大きな校舎である。「学園平面図」では正門、現在の西門、東門、そしてその北側に位置する四つの門が描かれるにすぎなかった。ところがここでは、本館の塔の向きをみると、現在の西門を正門としているように考えられる。他に「学園平面図」と共通している点は、彰栄館の場所に「Ⓑ新築大体育館」がみられることである。

一方、「学園平面図」には描かれなかった情報として、次の点が指摘できる。まず、寒梅館が建つ室町キャンパスの場所には、「Ⓒ新築中学校舎」および「Ⓓ寄宿舎」が建っている。「Ⓔ礼拝堂」、「Ⓕ」[11]、「Ⓖ図書館」[12]、「Ⓗアーモスト館」の位置は竣工以来変わりがない。しかしながら、「Ⓕ」の有終館の英語表記は、“Preparation”となっており、大学予科の機能を指し示していると考えられる。

以上が、同志社社史資料センターが所蔵している五枚の青焼き図面から読み取れることである。次節では、同

志社とヴォーリズ建築事務所との関係について、これまで明らかにされていない創立五〇周年記念公会堂建築計画を中心に述べていきたい。

二、創立五〇周年記念公会堂建築計画

創立五〇周年記念公会堂建築に関する経緯は次の通りである。特別な記載がない限り、創立五〇周年に関する史料はすべて、「同志社創立五十周年記念公会堂建築資金に関する報告書（一）」[13]および「同（三）」[14]による。一九二七（昭和二）年、堀貞一が同志社創立五〇年記念伝道のためハワイより同志社へ来校した際、「現公会堂の狭隘にして到底求道心に燃ゆる多数の生徒を収容し難き実状」に直面し、一同が大公会堂の必要性を認識した。女学生からの寄付を皮切りに、寄付を申し出る者が相次ぎ、たちまち数百円の額に達したという。さらに同志社記念公会堂建築資金募集が計画され、発起人三六名の連名で「同志社創立五十年祈念公会堂建築資金募集趣意書」が出された。寄附金の保管はすべて同志社財務部に依託された。建築は「ヴオリス会社に設計略図の調製を依頼せり」とある。ヴォーリズに依頼されたのは、収容人数が五千人、経費三五万円の大講堂の設計略図であった。すでに調製依頼がなされ費用が掛かっていることから、この設計略図がヴォーリズによって描かれたのは間違いないと考えるが、管見の限り図面はみあたらない。

しかしながらこの募金運動は、同志社専門学校高等商業部の校舎、新島会館、学生会館、女学校講堂などの各種建築資金の募集が輻輳したこと[15]、そして発起人の中心となっていた小川清澄と足利武千代が相次いで同志社を去ったことから、中止状態となった。特に痛手であったのは、女学校講堂つまり現在の栄光館の建設である。

大人数を収容できる講堂が建設されることになったために、公会堂建築計画自体が意味をなさなくなった。そのため、一九三三（昭和八）年には、新島寮（第二寮）を公会堂（礼拝堂）と理科学館の間に移築し、永久保存し「校内に於ける宗教運動の中心的機関として使用」する案が浮上した。そして、総長名をもって寄付者の同意が得られるならば、新島寮の移築費用に充てる考えが示された。そして、総長名をもって同志社本部の会議室で、京都在住の寄付者を呼んで集会が開かれた。参加者は有賀鐵太郎、デントン、速水藤助、加藤延年、片桐哲、南石福二郎、村岡景夫、中川精吉、大塚節治、末光信三、瀧山徳三、和田琳熊で、総長大工原銀太郎、財務部長島本徳三郎、庶務部長浅野恵二、宗教主任堀貞一が出席した。議論は決せず、和田を座長として第二回の寄付者会合が開催されることとなった。その後、行方不明であった募金趣意書が発見されたことにより発起人の氏名が判明し、全員への通知が可能となり、発起人会が開かれた。二回の発起人会を経て、最終的に返還及び他の寄付へ振替を求める寄付者に対してはそれに応じること、設計者ヴォーリズ建築事務所に謝礼金五〇円を支払うこと、その設計者への謝礼や通信費は本資金から支払うこと、そして差し引いた残高については大会堂建築資金とすることなどの五つの条件が付けられ、同志社財団に募金を寄付することが決定した。

なお、ヴォーリズ建築事務所による同志社が支払った謝礼金の領収書と礼状が存在する。それによれば、ヴォーリズ建築事務所の担当者は村田幸一郎[16]で、村田が不在のため小川祐三[17]が礼状を代筆している。後述するが、小川は創立六〇周年記念事業の建築計画において、ヴォーリズ建築事務所で中心的な役割を担っている。

以上のように、創立記念事業の一環として行われたヴォーリズによる建築計画と募金には、創立五〇周年記念公会堂建設という前例が存在した。次節では、一九三五年のヴォーリズ建築事務所と同志社本部、および同志社内部での往復書簡に注目し、図面作製過程について見ていきたい。

三、ヴォーリズ建築事務所による図面の作製経緯

一九三五年一月一六日、同志社財務部長上谷続は、同志社内の関係諸学校や図書館などに校舎の使用状況と新校舎設立に関する要望調査を行った。[18] それに対し同月二一日、同志社高等商業学校長の鷲尾健治は、教室・寄宿舎の増設および、簿記教室・会議室・応接室・タイプライター練習場・生徒控室の新設を希望として挙げた。高商は、一九二九（昭和四）年一一月に岩倉に移転したばかりであったが、教室や寄宿舎も不足していた。鷲尾と同様に、図書館長事務取扱荒木良造も上谷に図書館の現状と要望を提出している。[19] 各所から提出された使用状況と要望は同志社本部でまとめられ、ヴォーリズ建築事務所に伝えられた。[20]

五月二四日には計画がまとまり、小川祐三が湯浅八郎に宛て、平面図と配置図の青焼きを送付できる旨の連絡を行った。[21] 湯浅は、同年二月に総長事務取扱から第一〇代総長に就任している。ヴォーリズ建築事務所でこの建築計画を中心的に担当し、同志社との窓口となっていたのが小川であった。

翌二五日にはヴォーリズ建築事務所から湯浅宛てに、Lay Out, Seminary, Seminar Bldg, Main Bldg, Middle School, Gymnasium など計二〇点の図面が送付された。[22] ヴォーリズ建築事務所からは、体育館の図面だけが遅れることも連絡された。[23] 同月二八日に、湯浅から小川に宛て、計画設計図の青写真二枚受領についての書簡が出された。[24] 湯浅は、

御申越の該図に対する小職の卑見に関しては何れ改めて可申上候も不取敢右の内メイン・ビルディング及ジムネージアムのエレベーションの写生図本社募金運動用として至急入用に候間乍御多用中右作成方御手配

と述べ、同志社の募金運動に使用するための「メイン・ビルデイング及ジムネージアムのエレベーションの写生図」、つまり本館と体育館の立面のスケッチを急ぎ作製するよう依頼した。またこの時点で、中学の建築位置の変更の可能性が示唆されている。

湯浅の募金運動用の図面の依頼を受けて小川は次の返事を行っている。[25]

願上度候

猶中学の設計図に関しては位置等の関係上多少変更を要するやも不計候間右御含み置被下度候

五月廿八日附之御書翰只今拝見仕候（中略）メイン・ビルデイング、及びジムネージアムのエレベーションの写生図之件種々考慮致し居り申候。御社募金運動用して御入用なれば或はバード アイ ビユウを作り本館、現在の礼拝堂及びジムネージアムを入れて一目の内に校庭も見へる様にしては然可と考へ居り申候

就而現在の礼拝堂の図面を拝借出来ますれば誠に幸と存じますが若し図面が無ければ南側と西側の写真を御送附被下度御願ひ申上ます

小川は本館と体育館の立面の写生図を検討しているなか、募金運動用として本館と礼拝堂、体育館を入れた「バード アイ ビユウ」つまり鳥瞰図の作製を提案した。この提案に対し湯浅は、次の書簡を送った。[26]

陳者五月二十九日附頭記の件に関する貴翰拝誦仕候

御申越の全校庭のバーズ アイ ビユウ図は何れ是非御作製願上度と存居候へ共本社として目下焦眉の急務は同封別紙アーモスト大学の見本の如きメインビルディング及体育館の外景写生図に御座候而して右は必ずしも正密なるものを要せず大体のラツフ スケツチにて充分に候間右御含みの上至急作製方御手配願上度候

ここでは、鳥瞰図はいずれ必要となるので作製を依頼するが、目下の急務はアーモスト大学のような本館と体育館の外景写生図であると湯浅は述べている。募金運動の具体的展望として、換言すればキャンパス再整備を目標とした募金運動のために図面の利用が検討されていた。重要なのは、多くの大学建築が参照された中、特にアーモスト大学が見本として明言されていることである。[27]

本館と体育館の外景写生図作製にあたり、建築様式を決めかねていた小川は、湯浅に希望を照会した。[28]これに対し「本社新計画スタイルは我国学校建築に「エポック」を画けるが如きものに願上度候」[29]と新時代の象徴となる学校建築の依頼が同志社内部で決定した。

六月二九日、再び小川は湯浅に体育館についての意見を求めた。[30]当初中学は、烏丸通に面した今出川キャンパス内に計画されていたが、湯浅が五月二八日に中学の建築場所の変更を予告していたように、このころ烏丸通を隔て、現在の寒梅館が建つ室町キャンパスに計画が移行している。ここは、中学寄宿舎（北寮）が建っていた場所である。[31]中学校舎と寄宿舎が室町キャンパスに計画されることとなり、体育館の建築スペースに余裕が生まれたと考えられる。小川は、七月四日に主事森川正雄に体育館の収容人数と設計についての相談を行い、[32]森川からは椅子式との回答が出された。[33]

八月七日に小川が同志社を訪れ、上谷・森川と面会し、鳥瞰図及び体育館修正プランを受け取った。[34]小川が

九日に再び同志社を訪れることとなったが、湯浅は不在、森川は来日中のアメリカ水泳チームを案内中のため、財務部長の上谷と創立六十周年記念臨時事業部長の奥村龍三に小川の対応が託された[35]。体育館に関しては、八月一〇日に同志社を来訪した全米水泳チームのコーチ John M. Miller の意見を取り入れ、国際競技に使用することができる本格的なプールの設置が想定された[36]。

以上が、ヴォーリズ建築事務所と同志社本部と交わされた書簡を中心に明らかにした図面の作製経緯である。次に、同志社社史資料センター所蔵の図面と共に綴じられている「創立六十周年記念募金計画」の簿冊部分について言及する。

四、「創立六十周年記念募金計画」

簿冊の内容は、創立六〇周年記念募金についてであり、三枚の同志社用箋からなる。内容は左記の通りである。

同志社創立六拾周年記念募金計画

募金額　金二百万円也

内　一　建築資金　金一百万円也
　　二　講座研究退職資金　金一百万円也

期間　昭和十年乃至十五年
費途　左の如し

一建築資金　金一百万円也

一大体育館　新築
大学 同予科 専門学校 中学共用体育館
五千人収容の大講堂併用
温水プール設備
右鉄筋コンクリート三階建　建坪二、〇〇〇坪

二校舎新築
中学校舎並道場 礼拝堂 博物室 寄宿舎を含む
右鉄筋コンクリート建　建坪一、五〇〇坪

三女学校理科学館　新築
女学校理科教室並家政科研究室
右鉄筋コンクリート二階建　建坪四〇〇坪

四デントン教授記念館　新築

記念館並来賓ホステル同窓会室を併置
右鉄筋コンクリート二階建　建坪二〇〇坪

二講座研究退職資金　金一百万円也
一講座充実基金
二研究奨励基金
各部各科の研究奨励補助並図書部充実の基金
三留学基金
海外留学 内地留学の制度を確立のための基金
四退職慰労基金
教職員三百余名の為め退職慰労金積立並俸給補填のための基金

以上

但し右は本校の拡張充実のため将来募財せむとする金六百三拾万円也の一部募金にして本年は恰も創立六拾周年に相当するを以て之を記念し第一期計画として募金せむとするものなり
而して右の
総募金額　金六百三拾万円也
の内訳を概括すれば左の如し
一金三百三拾五万円也　建築資金

イ　本館（大学 専門学校 教室 研究室 礼拝堂 会議室 学生控室 本部事務局等）新築
ロ　男子体育館（五千人収容の大講堂併用）新築
ハ　女子体育館新築
ニ　温水プール新築
ホ　予科校舎新築
ヘ　高等商業学校校舎並寄宿舎改築
ト　同体育館新築
チ　中学校舎並寄宿新築
リ　男子寄宿舎並大学基督教青年会館新築
ヌ　学生会館新築
ル　女子理科学館並家政研究室新築
ヲ　女子部寄宿舎改築
ワ　女子学生会館新築
カ　デントン教授記念館（来賓ホステル同窓会室を併置）新築
一金三拾万円也　校地買収資金
一金二百六拾五万円也　諸積立基金並資金
イ　講座基金
ロ　研究奨励基金並図書充実資金

ハ　留学基金
ニ　学生福利資金―学資融通資金
ホ　俸給基金
ヘ　教職員福利基金―退職慰労基金

以上

この募金では、建築設備資金、福利奨学基金それぞれ一〇〇万円を使途とし、総額二〇〇万円の予定額が掲げられた。募金の期間については変動があるものの、当初は創立六〇周年を迎えた一九三五年から五年間の予定であった。

この時期、大掛かりな建築計画が必要であった理由として、「同志社六十周年記念趣意書　昭和一一年」[37]には、学生数が増加し校舎が老朽化したこと、そして「教育的施設としての本社諸校舎の能率低下を来し、早晩大改築をする必要に直面」したため、と書かれている。ヴォーリズ建築事務所による図面は、募金を集めるためのいわば青写真となり、前掲「同志社六十周年記念趣意書　昭和一一年」に体育館の図面の一部と立面図が掲載されたほか、同志社創立六〇周年記念誌『我等ノ同志社』（同志社事業部、一九三五年一〇月二七日発行）の口絵に鳥瞰図が掲載された。この鳥瞰図は、五月二八日に小川から提案され、湯浅がいずれ必要になるとして翌二九日に作製を依頼した鳥瞰図であると推察される。

五、創立六〇周年記念募金計画の終焉

約五年にわたる募金とヴォーリズによる建築計画は成就しなかった。『我等の同志社』を編集した奥村龍三に河野仁昭が行ったインタビュー[38]によると、募金の経過は左記の様相であった。

創立六〇周年事業金運動

―さっき、雑誌『我等の同志社』のお話がでましたが、六〇周年の募金の目標額はいくらだったんですか。

奥村　二〇〇万円。

―具体的にはどんな方法をとられたんですか。

奥村　学生については授業料と一緒に入学のとき確か五〇円納めてもらう、これを五年間続けることにしました。それから、これは私流のやり方なんだが、私は神戸のＹＭＣＡで募金をやったとき、まだ独身だったから月給七五円でしたが、寄宿舎でなら一五円で暮せたものだから、残り五〇円か五五円を二年間寄付することにした。率先してやらなきゃ人に訴え、人を動かすことはできませんからね。すると理事などがびっくりして、「奥村がそこまでやるのなら、われわれは当初の予定の倍額出そじゃないか」、ということになった。

同志社でもそういうやり方をするほかないと思い、湯浅総長が私の案に賛成してくれたものだから、総長も私も毎月月給の二割を寄付することにしよう、教職員もぜひそういう線で協力して欲しいということで、チャペルで祈祷会を開いたりして教職員に訴えた。ところが学内ではＯ教授とか二、三の

有力教授たちが、「薄給であるにもかかわらず、その中から二割出せ一割出せというのは無茶な話だ」と言いだして、学外でも吹聴した。だから卒業生の中には、「学内でも賛成していないそうじゃないか」と言う者が出るようになりましてね。あの運動がうまくいっていたら一つの精神運動にもなっただろうと思うんだが、うまくいきませんでした。しかし、たとえば青木要吉氏など、「湯浅総長や奥村がそこまで考え、背水の陣を敷いてやろうとしているのなら助けにゃいかん」と言って、三〇万円出そうと言うてくれたり、徳富蘇峰先生もいろいろ知恵をかしてくれましてね。私は総長と、徳富先生のアドバイスに従って東京の校友有力者などを歴訪したんだが、深井英五先生とかね、なかなか難しかった。

そのうちに戦争が激しくなり、募金は余計に難しいことになってきまして、あまりよい成績を収めることはできませんでしたよ。

―最終的には、目標の何割ぐらい集まったんですか。

奥村　確か三分の一ぐらい払い込みがあったと思います。

―まアまア成功じゃないですか。（笑）

奥村　当時としては、成功かも知れません。募金はむずかしいことだから。あの水崎基一先生の如き方がやってさえ、満額達成はできなかったんですからねえ。最後まで払い込んで下さった方が何人かいましたが、その中の一人は救世軍の山室軍平先生でした。

奥村によると、多額の募金を出した者も中にはいたが、六〇周年記念募金は学内者を大きく動かす募金運動に

はならなかった。最終的に創立六〇周年記念募金で集まった資金は、ヴォーリズ建築事務所への図面作製料等に九、〇〇〇円、大学教練教室建築費に五、一三五円、此春寮什器の一部および柵建設費に三、四〇九円一八銭、小松村キャンプハウス一棟に六五〇円、保津峡キャンプハウス建築費（敷地共）に三、六二六円五三銭、一九四一（昭和一六）年二月に建てられた精思館[39]建築費に五五、三九七円七五銭、その土地購入費に三二、五〇〇円、金石寮建築費に四、五八四円四〇銭、そして、その他雑費にあてられた[40]。

計画が変更されたのは、募金が集まらなかったことに加え、戦時体制に突き進む中で、すでに大きな校舎を建てることができなくなっていたことが要因としてあった。さらに戦局が激しくなり、大学、専門学校そして中学の学生生徒が長期勤労動員や学徒出陣し、学内は閑散とした[41]。

こうした状況を、ヴォーリズ自身はどのように見ていたのであろうか。一九三九（昭和一四）年三月一日にヴォーリズが同志社総長牧野虎次宛てに書いた英文書簡[42]が残されている。これによるとヴォーリズは、教育施設を増やすため政府が新しい建物の建築と改修の許可を出し教育施設建設の動きが出ていることに触れ、同志社の建築費が当初の予定より高くなったことは間違いないが、これからますます高騰するので、できるだけ早期に建てることを勧めている。この書簡から察するに、経済的な理由によって同志社からヴォーリズに建築の延期が伝えられたか、それにまつわる相談があったと考えられる。一九三五年から同志社の評議員に就いていたヴォーリズの説得にもかかわらず、同志社はこの建築計画を実行することはなかった。

なお、西南学院も一九三五年にヴォーリズに大学建築計画を依頼し、二年後に西南学院バプテスト大学建築計画が作製された。現在の福岡市城南区と早良区にまたがる干隈に土地を取得し、完成予想図を学院内外に報じていたものの、戦時色が濃くなったことにより大学開設自体を断念している[43]。

おわりに

以上、図面を中心に、創立五〇周年記念公会堂建設計画にも触れて、創立六〇周年記念募金計画について紹介した。いずれの募金も目標額には到達しなかった。加えて、その間におこった諸事情により、計画自体がやがて中止となった。創立五〇周年記念の公会堂を設計したヴォーリズ建築事務所の図面については不明であるが、創立六〇周年記念計画にみられる壮大なキャンパス整備計画を見る限り、創立六〇周年を建築計画によって盛り上げようとしたことがわかる。建築計画以外にも、校内で様々な式典や音楽祭が開催され、記念誌『我等ノ同志社』が発行された。

創立六〇周年記念事業としての同志社のキャンパス計画は、ヴォーリズ建築事務所がそれまで手掛けてきた学校建築とも共通するところがある。他と大きく異なっていると思われるのは、既存の建造物を残し、あるいは自身が建てた建造物であってもそれを排除し、新たなキャンパスを構想している点である。もし、ヴォーリズ建築事務所がひいた図面の通りのキャンパスが完成していれば、同時期に建てられた関西学院や神戸女学院のキャンパスに近いものであっただろうと想像される。

（注）

（1）同志社大学同志社社史資料センター（以下、同志社社史資料センター）所蔵、A7/5/S10。同資料の体裁は、前半に簿冊部分があり、後ろに付された袋に五枚の図面がまとまって入っている。簿冊部分については、本稿第四章で言及する。

（2）山形政昭『ウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築―ミッション建築の精華―』（創元社、二〇一八年、六九―七〇頁）には左記の記述がある。

ところで、アーモスト館から図書貴重品庫に至る時期に、ヴォーリズは同志社の新キャンパス計画を作成している。それは大学施設から中学部、新体育館、学生寮などを含めてキャンパス構成を再編する計画案が一九三四（昭和九年）に作成されている。スケールの大きさからして、将来の同志社のイメージを図化したものと思われるキャンパスのスケッチが、創立六〇周年記念誌として刊行された『我等ノ同志社』（一九三五年）の一ページを飾っている。

山形が指摘している「計画案」とは、本稿で紹介する一連の図面による計画のことであると推測されるが、山形は図面については明示していない。

なお、ヴォーリズについて参照した先行研究は次の通りである。前久夫、山形政昭「同志社の近代建築（下）―遺構と資料―」（『同志社談叢』第四号、同志社社史資料室、一九八四年）、山形政昭『ヴォーリズの建築―ミッション・ユートピアと都市の華―』（創元社、一九八九年）、山形政昭『ヴォーリズの西洋館―日本近代住宅の先駆―』（淡交社、二〇〇二年）、山形政昭監修『ヴォーリズ建築の１００年―恵みの居場所をつくる―』（創元社、二〇〇八年）、山形政昭「大阪女学院ヘール・チャペルと北校舎―戦後復興期のヴォーリズ建築―」（石田潤一郎監修『関西のモダニズム建築―１９２０年代－60年代、空間にあらわれた合理・抽象・改革―』、淡交社、二〇一四年）、一粒社ヴォーリズ建築事務所編、山形政昭監修・解説『ヴォーリズ建築図面集』（創元社、二〇一七年）、高澤紀恵、山崎鯛介『建築家ヴォーリズの「夢」―戦後民主主義・大学・キャンパス―』（勉誠出版、二〇一九年）、山形政昭「同志社とヴォーリズ」（認定ＮＰＯ法人　古材文化の会編『同志社大学致遠館調査報告書』、同志社大学同志社社史資料センター、二〇二〇年）、山形政昭、吉田与志也『ウィリアム・メレル・ヴォーリズ―失意も恵み―』（ミネルヴァ書房、二〇二一年）。

（3）これは、たたんだ状態の図面に墨書されたタイトルで、本稿では便宜上この表記を使用する。以下も同様である。図面表面には、“Sketch of Proposed Gymnasium Bldg for Doshisha Kyoto”および墨書「大体育館見取図」とある。日付は June. 20. 35、作製者は W. M. Vories & Co. Archtects Omi Hachiman Japan となっている。

（4）図面表面には、“Lay Out for Doshisha Univ. Kyoto”および墨書「同志社創立六拾周年記念計画」、「校庭平面図」とある。日付は June. 21. 35、作製者は W. M. VORIES & Co. となっている。

（5）図面表面には、“Sketch of Proposed Middle School Bldgs for Doshisha Kyoto”および墨書「中学校寄宿舎並校舎」とある。日付は July. 18. 35、作製者は W. M. Vories & Co. Archtects Omi Hachiman Japan となっている。

（6）図面表面には、“Sketch of Proposed Middle School Bldgs for Doshisha Kyoto”および墨書「中学校舎並道場礼拝堂博物室其他」とある。日付はJuly. 19. 35、作製者はW. M. Vories & Co. Architects Omi Hachiman Japanとなっている。

（7）図面表面には、“Birdseye View of Doshisha Kyoto”および墨書「同志社創立六拾周年記念計画」とある。日付はAug. 1. 1935、作製者はW. M. Vories & Co. Architectsとなっている。

（8）上和田茂「我国最初の総合体育館・東京ＹＭＣＡ旧体育館に関する史的考察―社会用体育館に関する建築計画史的研究 その2―」（『日本建築学会計画系論文集』第四六五号、一九九四、八一－八二頁）。

（9）ヴォーリズ設計の総合体育館については、上和田茂「戦前のＹＭＣＡ体育室における計画概念と形態に関する史的考察―社会用体育館に関する建築計画史的研究 その1―」（『日本建築学会計画系論文報告集』第三七九号、一九八七）、および注8に挙げた「その2」を参照した。

（10）前掲上和田、「戦前のＹＭＣＡ体育室における計画概念と形態に関する史的考察―その1―」、六六頁。

（11）現在の有終館。

（12）現在の啓明館。

（13）同志社社史資料センター所蔵、A7/05。

（14）同右。

（15）興味深いのは、同志社専門学校高等商業部の校舎については不明であるが、新島会館は大倉三郎設計、あめりかや施工、学生会館は大倉三郎の助手吉永参三設計、ミラノ工務店施工、女学校講堂は武田五一設計、大倉土木株式会社（現、大成建設株式会社）と、いずれも武田五一およびその弟子によって設計されていることである。ちなみに、一九一四（大正三）年竣工のジェームズ館は、当初ヴォーリズが案を数回作製したのち、武田五一の設計となっている。

（16）村田については、前掲山形政昭『ヴォーリズの西洋館』、一二二－一二三頁参照。

（17）小川については、同右、一二七頁参照。

（18）昭和一〇年一月二一日付、同志社財務部長上谷続宛て同志社高等商業学校長鷲尾健治書簡（同志社社史資料センター所蔵「CAMPUS PLANにつきヴォーリス建築事務所と往復文書」（以下、「往復文書」）、A6/11）。

（19）昭和一〇年一月二三日受領印ヵ、財務部長上谷続宛て、図書館長事務取扱荒木良造書簡（「往復文書」）。

(20) 昭和一〇年三月八日付、京都同志社本部森川正雄宛てヴォーリズ建築事務所小川祐三書簡（同志社社史資料センター所蔵、分室－二九四（一）－一〇－四）に、「先日御持参被下ました、御要求之リストを今一度調査致しましたが左記之点に付て良く判り不申候間何卒御教示なし被下度候」とある。小川が不明として詳細を訪ねたのは、法学部教室のうちの学生研究室兼控室の広さと収容人数、予科の普通講義室の収容人数、同じく予科の教練教室の収容人数や広さ、用途、予科の研究室兼図書室の用途である。

(21) ［昭和一〇］年五月二四日付、同志社総長湯浅八郎宛て小川祐三書簡（「往復文書」）。この書簡で小川は、「神学部ハ Main Building 北側之ウイング上階に取」るとしている。

(22) 一九三五年五月二五日付、京都同志社湯浅八郎宛てヴォーリズ建築事務所 I. Nishii 資料送付目録（「往復文書」）。I. Nishii は西井一郎。

(23) ［昭和一〇］年五月二五、二六日付、湯浅八郎宛てヴォーリズ建築事務所葉書二通（「往復文書」）。

(24) 昭和一〇年五月二八日付、ヴォーリズ建築事務所小川祐三宛て同志社総長湯浅八郎書簡控え、「同志社計画設計図受領の件」（「往復文書」）。

(25) 昭和一〇年五月二九日付、同志社総長湯浅八郎宛てヴォーリズ建築事務所小川祐三書簡（「往復文書」）。

(26) 昭和一〇年五月三〇日付、ヴォーリズ建築事務所小川祐三宛て同志社総長湯浅八郎書簡控え、「同志社計画設計図の件」（「往復文書」）。

(27) 「往復文書」には、AMHERST ALUMNI COUNCIL NEWS（The New Gymnasium）があり、アーモスト大学の新体育館の詳細と立面スケッチが掲載されている。この他にも、Carleton College, Dartmouth College, Oberlin College, Yale University, St. Lukés Medical Center, 日本民藝館、神戸女学院の鳥瞰図や立面図などのパンフレットや新聞の切り抜きがある。いずれも新キャンパス建築構想にあたり、参考にしたと考えられる。さらに Mills College の Alumnae House の設立構想についての広報誌と思われるリーフレット、ヴォーリズ建築事務所の事業と設計料金について書かれたリーフレットがある。

(28) 昭和一〇年五月三一日付、同志社総長湯浅八郎宛てヴォーリズ建築事務所小川祐三書簡（「往復文書」）。

御申し越と相成り候メインビルディング、及び体育館の外景写生図に付て直様取り掛り可申候。実は目下建築様式に付て種々考慮中にて御座候間若し先生方にて特に御希望之様式御座候へは何卒御一報なし被下度候

(29)［昭和］一〇年六月三日付け決裁印あり書付（「往復文書」）。
(30)昭和一〇年六月二九日付、同志社総長湯浅八郎宛てヴォーリズ建築事務所小川祐三書簡（「往復文書」）。
(31)「中学部の方は先日承り候通り烏丸通りと上立売通りの西面に設計致し三階建にて大体修まり」（同右）。
(32)昭和一〇年七月四日付、京都同志社内森川正雄宛てヴォーリズ建築事務所小川祐三書簡（「往復文書」）。
(33)日付不明別紙書付。「折角のこと故椅子式を希望すH.Y.」「七月六日電話にて通告　森川」（「往復文書」）。
(34)昭和一〇年八月七日付、京都同志社湯浅総長、森川正雄宛て小川祐三書簡（「往復文書」）。
(35)［昭和一〇］年八月九日付、上谷財務部長、奥村事業部長宛て森川正雄「小川氏来訪ノ件」書付（「往復文書」）。
　昨八日夜近江八幡ヴォーリズ事務所小川氏本九日午後二時来訪の旨電報有之候につき取不敢総長不在なれども、御来社を待つ旨逐電話置候間何事御引見願上候
(36)年月日不明、「同志社体育館設計図に対するJohn M. Miller氏（全米水泳チームのコーチ）の意見（昭和十年八月十日来訪）」（「往復文書」）。
(37)同志社社史資料センター所蔵、A7/5/S11。
(38)「奥村龍三氏（元専務理事）に聴く昭和十年代の同志社」、（同志社『同志社時報』第七〇号、一九八一年三月、神戸市の奥村邸にて一九八〇年八月七日収録、河野仁昭（聴き手））。
(39)精思館は、大学の大教室と専門学校の教室不足を補うために一九四一年に建てられた木造校舎で、冷泉家の西の藤谷子爵家の土地を購入し、現在の徳照館付近に建てられた。河野仁昭『キャンパスの年輪―同志社今出川校地―』、同志社大学出版部、一九八五年、六〇－六一頁。
(40)「同志社　予算書、決算書、会計報告書綴」、同志社社史資料センター所蔵、A6/03。
(41)前掲河野、六一頁。
(42)一九三九年三月一日付、牧野虎次宛てヴォーリズ書簡（同志社社史資料センター所蔵、分室－二九五（二）－三－七一）。
(43)前掲山形『ウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築』、一一六－一一八頁。

謝辞　本論文の執筆にあたり、株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所中山猷児様、芹野与幸様、公益財団法人近江兄弟社藪秀実様の多大なる御協力と御教示を賜りました。この場に記し、感謝申し上げます。